
葉吾舞（ハーブ）戦隊ジャスミンジャー

森田カズキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

葉吾舞戦隊ジャスマシンジャー

【Zコード】

Z8367C

【作者名】

森田カズキ

【あらすじ】

ヒーローの友達は愛ちゃんと勇氣くんだけじゃない！正義くんだつているんだぞ！！町の平和を守るため、わけあり5人が悪人達をちぎつては投げ、ちぎつては・・ハゲる！？

正義とはタイミングを纏つむものなり。（前書き）

今までの戦隊ものの固定観念をブチ壊してみました。
しかし作者が固定観念を理解していないので、所詮はこんなもので
す。

正義とはタイツを纏つものなり。

子供の頃は戦隊もののヒーローに憧れていた。弱きものに優しく、悪しきものには厳しく、そんなヒーローに自分もなりたいと思つていた・・。

だが、少し大人になつて、戦隊もののヒーローが信じられなくなつた。

人は、何を持つて物事を正義とみなすのか、何を持つて悪と呼ぶのか、実は正義と悪なんて境界線は存在しないんじやないかって、そう思つよになつてしまつた。

ああ、だからもうこんな馬鹿なことはやめさせてくれ。

「キヤ——！——！」

街中で、1人の女性の悲鳴が聞こえた。町の中心で、男3人組みが1人の女性を囮んで何か話しかけている。

男3人組は明らかに堅気の人間ではない、俗にいう「ヤクザ」であろう。それがために誰も女性を助けようとはしない。皆所詮わが身が一番かわいいのだ。だがそれは悪いことではない。誰かを助けるということは自分の身の保障をしなければならない、自分の身も守れないような人間が、誰かを助けるなど不可能であり、迷惑な話である。

しかし、本当に正義というものがあつたとするならば、この悲鳴を見逃すはずはない。正義は確かに存在するのだ。

『皆、行つぐぞーー（ ） 、 イエエーイ 』

町のビルに設置された天気や、時間を表している電光掲示板の文字が突然、顔文字入りのふざけた文章にかわった。

その瞬間。

「「わつしょーい！！」」

男3人組と女性1人、ギャラリー数十名はその場に登場した集団に注目せざるをえなかつた。

赤、青、ピンク、黄、緑のタイツを着た、どうみても戦隊もののヒーローにしか見えない集団が現れたからだ。

日常生活において、普段着がタイツという人間はそんなにいないだろ？

「なつ・・何だお前らはーー！」

男3人組みは、ありきたりなセリフを吐いて、しまつた！と思つた。こんなお約束のセリフを吐いてしまつた以上、自分達は一話限りのやられ役だと気がついてしまつた。

「「お前達、そこで何をふざけているーー！」」

男3人組は幼少の頃より素行の悪い人間だつた。だから、この手の言葉は何度も聞いていた。耳にタコができるぐらいだろ？ いや、そのタコが彼女にイカを連れてくるくらい聞いてきた。

だが、こんな全身タイツの人間にこのようなセリフを吐かれるとは

思わなかつた。この集団に言われて初めてわかつた。やはり大人たちが言つたように自分達はふざけていたかもしれない、だが、何といえばいいのだろうか。

とにかく、こんなこんな・・ふざけた連中にだけは言われたくないつた。そしてまさか自分がこのセリフを吐く日が来るとは思わなかつた。

「お前らひいや、ふざけた格好してんじゃねーか!! ふざけてんのかー!!」

「そうだ、今時銀行強盗でもストッキングはかぶらねーぞー!」

「時代はパンスト」

「「その女性を放せーーー!」」

「お前ら俺たちと会話する気あんのかアー!」

会話がまつたくかみ合わない、だが、正義とは「うごつものである。己が一番正しく強い、正義とはそうでなくてはならないのだ。そもそもその考え方自体が間違っているのだが・・。

「とにかくその女性を放せ。さもねえと・・どうなるか、そんぐらいはわかるだろ?」

全身を縁のタイツに包んだ男が、他の4人を差し置いて、男達の前に出た。

差し置いて、といつよりは、他のものがやる氣がないだけのような氣もしてくるが・・。

そんながんばれる精神にあふれた縁を襲つたのは、男達の辛うつな暴言だつた。

「つるせーな縁のクセに田立つてんじゃねーよ

「縁は黄色と青を足して2で割ったような役割を果たしつけての

「加法混色、加法混色」

男達はそういつた後、自画自賛してみせた。笑いがとまらない、とまらない、とまらない、そのまま息の根を止めてやるつかと思つぽど騒がしい。

ついに縁は、縁のクセに全身を赤くしながら、叫んだ。

「・・オレだつてなあ、オレだつてこんな変な格好したくなえし、赤でもねえただの縁なのにリーダーぶつてベラベラ喋りたくなんかないわ！でもな、見てみろ！…」

縁のいとおり、他の色の隊員を見てみると、何といふことだらうか。

本来リーダー格であるはずの赤はパソコンに夢中だし、クールな青は本を読んでいる。よくみるとたまに挿絵が入つてるので、おそらくライトノベルだらう。

「赤がインドア派なんだよ・・パソオタなんだよおおおおー！…」

『縁～誰がパソオタだつて～（・＜・） ブリブリ。パソコン愛好者つていつてよ』

電光掲示板の文字が、先ほどの文字から変わつた。ビリヤリ、パソオタと言つて怒つてゐるようだ。

しかしそんな時でさえ、赤はパソコンを手放そつとはしない。

「意味は同じことだらうが！」

赤と緑の喧嘩に耐えられなくなつた男達が、正論を言い始めた。

「お前ら街中に私情を持ち込むなよ！何しに来たんだ」

「そうだ！町は皆のものだぞ！！」

「1人はみんなのために、みんなは1人のために」

今となつては男達の言い分の方が正しい。

これが正義の姿なのか・・と少し嘆きたくなるところで、またしても掲示板の文字が変わつた。

『正義の味方だよ～ん￥（。￥）（＼。）＼＼＼＼＼＼』

「ウオイー！そいつセリフは口に出せーな？折角いい」と言つてん
だから」

3人組はむしろいい人になつていた。ある意味、正義の力が悪を正した瞬間ではないだろうか。

「赤は・・諸事情により、このよだんな方法でしか自分のお気持ちを
伝えることができません・・お許しを」

これまで無言でいたピンクが男達にそう告げた。声の感じからして、大の男がピンクを努めるという最悪の事態にはなつていよいよだ。

「な・・何でっすか」

ピンクの清楚オーラに負けて、男達はつい中坊口調（敬語を使うのが照れくさい年頃の少年がよく使う口調）で話しかけてしまった。

「そないな細かいことは気にしなくてもええやない。だつてあんた

らは、知りまへんまんま豚箱に行くんやから

「ええつ！？俺らそんな酷いことしたつけ！？」

「ナンパは罪つすか！？そんなんすか！？」

「硬派ならいいのかよ・・硬ければいいのかよ

黄色といづべきつにカラーと、その発言に男達は大いに傷ついた。声の感じからこって、ピンクと同様男ではないようだが・・。

「そうだ、ナンパは罪だ極刑だ。といつことで成敗させてもひつ・くらえ『ブリリアント・パンチ』！…」

「ぐばああああああ…！」

輝く拳が、男達3人組を浄化させる。一瞬痛みを感じるが、その後は暖かい光に包まれる。そんなやわしい拳だ。

『縁～ブリリアントつて何だよ・・〇〇。（ 。 ） y - ～』

「彼は次の授業英語の単語テストがあるから、単語を必殺技に組み込んで無理やりにでも覚えようとしてるんだよ」

青がライトノベルを読みながら、答えた。パソコンで会話をする赤も赤だが、こいつもどうかと思つ。

「そないやので覚えられたら苦労せんわよ・・ただでもえ、縁は英語の成績が悲惨やのに・・

「でも、効果はあるみたいだよ？単語テストの点数も上がつてゐたいだし・・」

「あ・・あの、貴方達は、一体・・？」

やつと男達から解放された女性が、謎の集団に尋ねた。他のギャラ

リーもこのタイツ集団の正体が気になっていたところだった。
が、集団は答えない、しばらくの沈黙があつて、その後こう答えた。

「「我々はジャスミンジャー！正義の味方です！！」」

ああ、正義というものがあるのなら、どうして正義はこんなに怪しい
タイツを装備しなければならないのか。
誰か俺に教えてください。

正義とジャティッシュを纏つものなつ。（後書き）

・・おふざかがすきましたね。
といつあえず、続るものなんで、暇があったら読んでやつてください。

君は、茉莉花の文字が読めるかー？（前書き）

ジャスミンジャーの正体発覚ー？
中途半端な感じで終わっています。

君は、茉莉花の文字が読めるか！？

「悪を正す存在となつてください」

それが初代の教えた。だが、俺はいつもそのセリフを聞いて笑いたくなる。何を持つて正義というのか、なあ、正義ってのは誰の正義なんだい？悪つてのは誰にとつての開くなんだい？

俺にとつての正義が、アンタの正義とは違つたらそれは悪になるのかよ。

俺はこの縁のタイツに身を通すたびにぞつぞつ。なあ・・・ぞつなんだい？初代校長・・・「赤月正義」さんよ・・・。

『ぞつした松葉、背中に描かれた我々が校章・茉莉花が泣いてるや』

(。ー。) ホロリ『・・・お前・・・普通に話そづば・・・?』

こんな更衣室にまで電光掲示板持込みやがつて・・。ヒ、ジャスミンジャーで縁を努める男、く松葉博^{マツバヒロタケ}之へは思つた。

『えへ？でもさあ・・・口に出してしゃべるのつて何か・・疲れない？(。ー。)』

「お前・・キーボード打つほうがよっぽど疲れるだろ？」

「松葉くん、許してあげて」

「浅葱・・」

ジャスミンジャーでは青というポジションのく浅葱航^{アサギワタル}ベルを片手に言つた。

体格のいい松葉と比べると線の細い感じがするさわやか系美男子だ。しかし内面は・・。

「虎次郎は仕方ないんだよ・・・事情があつてティスプレイを通して
でしか会話ができない・・・けど、それでもこつして虎次郎の意思を
知ることができるんだ・・・だから・・・」

「つたぐ・・・何度もその話は・・・もういって」

松葉は浅葱の悲しそうな顔を見ると、何故だかとても悪いことをし
たような気分になる。だからこの話をするとほとんどの確率で松葉
が折れることになる。

『男にはミステリアスな面があつたほうがいいのさ・・・（○一

○） ムフフ』

「テメーもちつたあ反省しろやーー！」

反省しない顔文字男、その名は「赤月虎次郎」と言った。
アカツキゴジロウ

こんなふざけた文章を書いている男だが、外見はまったくふざけて
いない。メガネをしたインテリ系イケメンである。

これで笑つたりすれば女子にも人気がでるのだろうが、まったくと
いつていいほど笑わない。というか感情を見せない。

一応親友であるはずの浅葱にも笑顔を見せることはない。何故この
二人が行動をともにするのか、松葉は知らない。

「あーあ・・・折角の昼休みが台無しだ・・・やっぱ戦隊なんて辞めよ
うぜ。やらなくたつて誰も責めやしねえって」

『そ・れ・は絶対だめなのー。（^――^・=・^――^）』

「・・お前・・・」

目の前にいる無表情の男がこんな顔文字を打つて居るなんて信じた
くはないが、現実そのだだから仕方がない。

「松葉くんには悪いけど、僕もそれは無理だと思つよ。生徒会長に『赤月』が君臨している間はね」

生徒会長・・何といふことだらう。ジャスミンジャーは現役高校生でおまけに生徒会役員だったのだ。

県立茉莉花高校 通称ジャス高
（ジャスミン）

最寄りの駅から20分。「最寄りだと?全然近くねーじゃん。詐欺だよこれ」と、生徒の誰もが言つ。

うつかり間違えると某大型スーパーの名前になつてしまつので注意が必要だ。気をつけよう!

とまあ名前は変わつているが、どの都道府県にもあるであろう普通の高校である。創立50年、そろそろ建物にガタガ・・おつと風格が出てきたころだ。

教育目標は「義・愛・変」左から順に「忠義の心」「愛する心」最後の「変」は「変な心」ではなく、「変える心」とこつことらしく。（生徒の間では「変態な心」「変質な心」など、嫌なイメージで呼ばれている。）早く教育目標を変える（笑）ことをお勧めする。言いたいことはわかるのだが・・。

校章は先ほども書いたように、もちろん茉莉花の花である。制服は、世界征服できそうな黒い制服だ。そんなところから、もうひとつのがだ名は「黒高」である。

生徒会長は毎年『赤月』の名を持つものが受け継ぐ。私立でもないのに一体何なのだろうかこの君臨ぶりは。

松葉は昼にあつた事件のせいで英語の授業で行われる単語テストを見事不合格となり、補修を受けた後で生徒会室へと向かつた。できれば早めに生徒会室に入りたかつた松葉にとつて補修は地獄である。

生徒会室のドアに設置された電光掲示板には、すでに文字が浮かびあがつている。つまり、生徒会長赤月はこのドアの向こうにいるのだ。

ああ、何といつじとだ。松葉は信じる神もいないくせに神を呪つた。

電光掲示板にはこう書かれていた。

『体育委員長・松葉。お前がドアの前にいることはみんな承知しているぞ。さつさと入れよ（・・・）＝（○――）○・・・』

「オメーが先に来てたらこのドアの前で1～3番まで校歌を歌つた後さらにオメー作のマボロシの4番まで歌わねーと入れねえだろが！…』

松葉の怒りは爆発した。他の役員もそつなれば文句は言わないだろうが、何故か松葉だけこんなルールが出来上がつているのだ。

『この学校を愛しているなら余裕じゃない？（○）／フレー￥（○）／フレー￥（○）』

「学校と4番の因果関係はねえ！－何故なら4番はオメー作だから！…』

松葉はドアに怒鳴り続けている。ドアにだ。ドアに…。端から見たら、かなり怪しい。

『そんなワガママ言つていいの？ガツツだぜ！』

『ア』

「こちいち催促してんじゃねえよ……あ～っ……くそつ……ジャスミン……それは愛！お茶の中で奏でるハーモニー！……不思議な香りに包まれて、ううーん！ジャスミン……校歌は頭痛に神経痛……ジャスミン……それは恋……』

茉莉花はジャスミンって読むんだよ！勉強になつたね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8367c/>

葉吾舞（ハーブ）戦隊ジャスミンジャー

2010年10月28日07時19分発行